

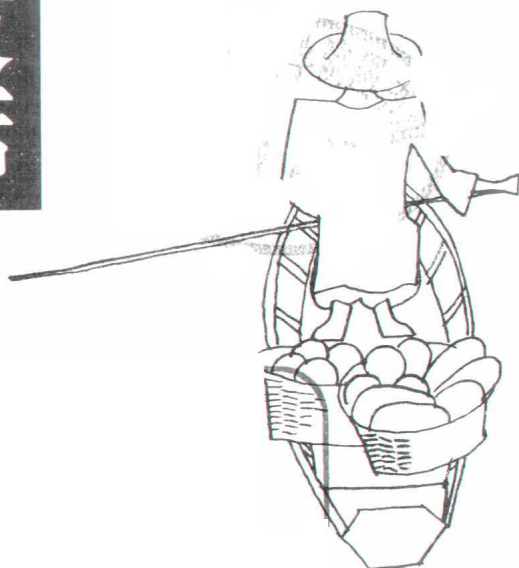
深田祐介

バンコク もふく 喪服支店



深田祐介

ハンコク喪服支店



文藝春秋

バンコク喪服支店^{もふく}

一九八七年七月二十日 第一刷

定価 九五〇円

著者 深田祐介

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話 〇三(二六五)一二二一

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Yūsuke Fukada 1987

Printed in Japan
ISBN4-16-309800-3

目次

バンコク喪服支店

5

火牛の海

93

ミンダナオ最前線

167

装画・深井
装幀・多田
進 国

バンコク喪服支店

バンコク喪服支店

1

今の日本には例がないので、なかなかわかりにならないかもしれませんが、水上の生活、というのは実に快適なんですよ。

タイはバンコクのメナム川の岸近く、ふとい孟宗竹もうそうちくを組んだおおきな筏いかだが浮いておりまして、そのうえに、それでも小部屋が三つある、木造の小さな家が建っているんです。川岸にしっかりと繋つながれてはいるんですけど、いつも穏やかな川の流れに漂うようにかすかに揺れている。船が行き過ぎると、かすかどころではなく、おおきく揺れるこの家が、寡婦やもめ暮しの私に残された、水上の家なんです。

この孟宗竹の筏の家に住みたての頃は、水の上にいる、とおもうだけで、船酔いしそうな気分になって、川岸にあがって深呼吸したりしたものですけど、今はもうすっかり慣れてしまった。

なによりこんな安眠できる家は、簡単にみつからないとおもうんですね。ちょうど揺り籠にで

ものせられてゐるぐあいにはよく揺れて、しかも川岸に寄せる波が子守歌のように聞えてきて、たちまち眠りに落ちてしまふし、朝も、うかうかすると、寝過してしまふんですよ。

その朝も明けがたに数回、筏の家がおおきく揺れて、タイ海軍の軍艦かなにか、おおきな船が通つてゆくな、と夢のなかでおもつたのを覚えています。またうつらうつらと眠つてしまい、

「奥さん、会社に遅れますよ」

とメイドのデンに起されて、あわてて小さい寢室のベッドを跳び降り、白い蚊帳かやから這い出しました。眼覚し時計が鳴つたようですが、無意識のうちに手を動かして、止めてしまつたらしいんですね。

食堂兼居間兼台所の部屋で、デンが作ってくれた白いお粥かゆと厚目のタイ式卵焼きの朝食をかきこんでいますと、早くも玄関前の筏の竹を踏む音がして、ドアをたたきながら、「ファミエ、遅いわよ」と怒鳴る声がありました。会社の若い同僚、カニカの声です。

大急ぎでデンにその日の買物だの洗濯だのの日課の仕事をいつけて、表にでたんですが、今度はカニカの姿がみえない。

メナム川に面したほうで「ちよつときてよ」マニマン・ノイカと叫んでいるカニカの声がして、そちらにまわつたところ、カニカは水上の物売りルア・カイ・コンの船から、菓子やら果物やらを買いこんでいました。

そもそもこの家は別れたタイ人の夫の父親の持物だったので、別れた夫の父親は、メナム川の水上をにぎやかに往来する船を相手にガソリンを売っていたんです。この家はつまり船用ガソリ

ン・スタンドだったんですね。だから岸と反対側の、川に面した側は、ガソリンを買いにきた船が横着けしやしやすいように小さな棧橋みたいになっていて、使い古しのドラム罐がいくつか置いてある。

その棧橋で、果物や菓子の入った紙袋、ビニール袋を受けとりながら、カニカは、「社長用に余分に買っといたわ」と川風に髪を散らせて、いいます。

カニカは、私が可愛がっている会社の同僚で、細身の躰からだ、細面におおきな眼を光らした、なかなかの美人です。カニカと私は近くの船着場、つまり乗り合い船ドブ・ハン・ヤオの停留所にゆき、折りから入ってきた、昔の日本の屋形船をおおきくして、縦に細長くひき伸ばしたような屋根つきの船に乗りこみました。

長い鉄のパイプのような舵かじをかかえた運転手が、ワンマン・バスのドライバーのように乗船賃を受けとったりするので、腕がよくて、群がる川舟のあいだをほればほれるくらい巧みにすり抜けて船を発着させます。川の真ん中にいれば、この屋形船は日本のトラックのエンジンをつけていますから、別名、「スピード・ボート」と呼ばれるくらいの猛烈なスピードで突っ走るんですね。

気持のいい川風に吹かれて、オリエンタル・ホテルの傍の船着場、つまり停留所で降り、シーロム・ロードにあるタイ三愛レイヨンに向いました。私は走りたかったけれども、タイじゃ、うっかり走ると、殺人事件でも起ったかとおもわれるのがおちだから、いらいらしながら、ゆっくり歩いて行った。

ビルの九階にあるタイ三愛レイヨンの大部屋に入ってゆくと、受付のカウンターに広げてる出勤簿を総務係のブラシートが、納いこむところなんですよ。

「待ってくれんとね、ブラシート」

つい故郷の九州弁がでてしまって、私とカニカは出勤簿に跳びつきました。

タイの会社は、始業時刻が早くて、朝八時十五分に始まってしまふんですよ。八時十五分の始業時刻までに跳びこんで、真ん中に青い横線をひいた出勤簿の上のほうに名前をサインしなくちゃいけないんで、八時十五分を過ぎると、出勤簿はブラシートの机に移されてしまふ。遅刻者はブラシートの見ている前で、遅刻したしるしに青い線の下のほうにサインをするんです。

ブラシートは、漆黒というんですか、真物の黒さの髪に、おなじ色のふとい眉毛、褐色の顔のなかで、白眼の部分が青く光っている、といった好男子ですが、厚い、柔らかそうな唇が優しい感じで、じっさいよく話がわかる。

彼の時計は、始業時刻の際はいつ也十分遅れていて、終業時刻のときは逆に十分進んでいる、「親切時計」とでも呼ぶべき、ありがたくもふしぎな日本製品なんです。

だからこの朝も、ほんとうは十数分遅刻した勘定なんだけど、ブラシートは魅力的な唇をにやりとくずして、「フミエ、近頃、よく遅れるね」といいながらも、出勤簿を私たちの前に広げ直して、サインするのを認めてくれました。

私がこのタイ三愛レイヨンに採用されたのも、じつは水上家屋に住んでいるのが、縁みたいな

ものだから、世のなかわからないもんです。

だいたい九州、福岡県の遠賀川^{おんが}流域育ちといえ、^{かわすじ}「川筋もん」などと呼ばれて、昔、附近に鉾山の多かったせいか、気性の荒いことで有名なんですけれども、私はこの遠賀川中流の飯塚市で生れ育って、高校まで出たんですね。

そのあと兄を頼って上京をして、二年ばかり千駄ヶ谷のビジネス・スクールや神田の英会話学院で、英語や秘書の勉強をした。なぜか高校生の頃から外資系の会社の秘書になりたいと考えていたんですよ。格好がいいし、なにより東京で自活できるだけの、高いお給料を貰えるのが魅力でしたね。

その人生計画は首尾よくゆきまして、中近東系の会社の秘書をずっとやっていたんですけど、会社のパーティで、日本の水道設備関係の会社に一年間実習にきていた、タイの会社員、スラチャート・ナナコーンという男と知り合って結婚して、バンコクにくることになったんです。

最初、バンコクにきて、いきなりメナム川、正確にはチャオ・プラヤ川に浮ぶ、竹の筏のうえの家に連れてこられたときは、ほんとうに驚いた。

夫のスラチャートは「昔、ここで親父が船用のガソリン・スタンドをやっていたんだけど、年取ったので、商売を止めてしまった。今は空家になっているから、取り敢えずここに住もうや」と平然としているんですよ。

日本じゃ、水上の筏の家に住むなんて、およそ考えられないから、私は恐しく貧乏なひとと結

婚してしまつたんだ、と青くなり、二、三日は心もどなく揺れ動く船の家に坐りこんで生きた心地がしませんでしたね。「参った、参った」とおもつて、艀の力が抜ける気がしました。

そのうち、人心地が着いてくるに従つて、水上に住むというのは、生活様式ライフスタイルの問題であつて、必ずしも生活程度の低さを意味しないことが、わかつてきた。川のうえに住んでいるひとが必ずしも貧乏とは限らなくて、お金はあるけれども、川のうえの生活が好きで、離れられない、というひとでも少なくないんですね。

それに夫の父親も、ここは商売の場所として使つていたので、夫や子どもたちは市内にある別の家で育つた、ということもだんだんにわかつてきた。

筏のうえの家といつても、かなり高い床を張つた、ちゃんとした木造の家で、狭いながらも居間に寝室、メイドの部屋もあります。居間に、絨毯を敷いたり、チークの椅子、テーブルを置いたりし始めた頃にはすっかり筏の家が気に入つてしまつた。お便所だつて、それこそ真物の水洗でしよう。

だけど家が気に入つてきた頃になつて、今度は亭主が別れたいといひだしたんだから、世のなかはうまくゆかないんですよねえ。

「どうも日本の女は、せっかちだし、気が強過ぎて、自分はうまくやつてゆく自信がない」というのが夫のいいぶんで、「この家はあんたにやるから、離婚届にサインしてくれ。別れたあとはこちらでガソリン・スタンドやつて食へて行つたらどうだ」と仏さまのような穏やかな表情で、こう

いうきついことをいうんですね。

「気の強いことで評判の『川筋の女』としては、離婚したがる亭主を追っかけまわすようなみ^ふつ^らともない真似は意地でもしたくないので、そのまま市役所に行って離婚届をだしてしまった。タイの離婚届の場合、配偶者ふたりのサインに立会人の署名が必要なんですけど、そこは心きいたお国柄、市役所の窓口のひとが、立会人になってくれました。」

亭主もちゃんとしたひとで、数日後に家の権利証やガソリン・スタンドの営業許可証を届けにきてくれたんですね。

ガソリン・スタンドの経営も結構だけど、私はまず手慣れた秘書稼業の口を探してみようとおもった。英語やタイプは訓練積んでいるし、タイ語は先生について、片ことなら喋れます。

ちょうど日系企業で、郊外に工場を持ち、市内のシーロム・ロードに事務所を持っているタイ三愛レイヨンが、社長秘書を募集している、と聞いて、ともかく飛びこみのかたちで、面接試験を受けてみたんですね。

相手が日本企業だということで和文の履歴書も添えておいたところ、

「池野文恵さん、か。へえ、あんた、川筋生れなの。あたしゃ、若い頃、博多の店にいたから、あの辺はよく知ってるよ」

総務部長が目下欠員だとかで、面接試験はタイ三愛レイヨンの社長とプラシートがやったんですが、社長は本籍地をみるなりそういった。

「そういえば、これは九州の顔だ。それも相当、上等な九州だな」

よく南方型といわれる、私の大造りな顔を眺めています。

タイ三愛レイヨンの社長は、あとから知ったんですが、水野正太郎という名で、湯あがりみたいに艶々と光る顔に金縁眼鏡をかけ、ごま塩の髪をきれいに七三に分けて、なんだか天麩羅屋の親父さんみたいなひとだな、と私はおもった。

「それで現住所がチャオ・ブラヤ川になっているのはどういわけですか」

「私、川のうえに住んでいるんです」

水野社長は呆氣あぢけに取られた顔になり、ならんですわっていたブラシートは、親しみをこめた顔になってにやりと笑った。

「へええ、日本人で川のうえに住んでいるひとがいるとは知らなかった。あんた、ひと口にいやあ、水上生活者か、これはなつかしいやね。私は東京下町生れなんだけど、昔の同級生にはずいぶん水上生活者の子どもがいてね。細い板伝っちゃあ、よく船の家に遊びに行ったもんですよ」

社長はすっかり感じ入ってね、首を振っているんですね。

「遠賀川の川筋に生れて、メナム川のうえに住んでいるのか。こいつは川がらみでおもしろいや」

半袖シャツの下の突きでたお腹をぱちぱちとたたいていい、あとは面接試験らしい質問もしないので、半ば諦めていると、水上の家に郵便がきて、採用と決ったんです。水上の家といっても、